

令和元年度第2回外部評価モデル小委員会議事概要

- I. 日 時：令和元年9月18日（月）10：00～12：00
II. 場 所：公益社団法人 私立大学情報教育協会事務局
III. 出席者：角田担当理事兼総括委員長、大原主査、片岡委員、佐渡友委員
事務局：井端事務局長、中村

IV. 検討事項

大原主査が議長となり、以下の通り検討事項について研究を行った。

1. 外部者による学修到達度点検・評価モデルの課題について

事務局長から前回の委員会での検討を踏まえて整理した、資料①の「外部評価モデル構想の確認と課題洗い出し(メモ)」について、概ね次の報告・説明が行われた。

- ① 本構想の狙いは、生涯に亘って学生が身に付けておくべき考える力や表現する力などの到達状況を第三者の観点から客観的に点検・指摘し、卒業までに達成する訓練の仕組みを第一義としていことから、成績評価モデルとして誤解を招かないようにするため、研究のテーマを「学修成果の質保証に向けた外部評価モデル構想の提案」から、「思考力等の外部点検・評価・助言モデル構想の提案」に変更することを課題とした。
- ② 提案の背景としては、変化が激しい不透明な社会では答えが定まらない課題に自ら主体的に取り組む意欲と、論理的・批判的思考力、合理的判断力、論旨明快に表現する力、多様な価値観を持つ人と協働して新たな価値創造に関与できる人材の育成が求められており、社会の期待に応えられる質保証の仕組みとして、学内での点検・評価に加えて大学と社会で学びの振り返りを支援する外部者による客観性のある到達度の点検・評価・助言が不可避となってきたことを確認した。
- ③ 知識獲得を中心とした学修到達度の点検・評価は、知識詰め込みによる暗記型学修を誘発し、結果として本質を捉える学修を後退させてきた。外部者によるビデオ試問を通じて本質を捉える学びの到達度を振り返り、不足する能力を学生にフィードバックすることで真理の探究に真剣に向き合う学びを助長することが確認された。
- ④ 外部者による点検・評価・助言・助言モデルの仕組みを図案化するため、「分野別外部点検・評価・助言モデルの概念図」と「分野横断外部点検・評価・助言モデルの概念図」の表現及び図案の用語の一部を別紙資料②のように修正することが確認された。
- ⑤ クラウドを活用した外部者による点検・評価・助言のイメージは、外部者の点検・評価会議で策定した到達度点検・評価基準に沿って、映像、写真、アニメーション、図・表などを用いて試問するビデオコンテンツを点検・評価・助言クラウドに多数蓄積しておき、学生が教室のパソコン等端末を介して問題を聞きとり、記述式でクラウドに回答を行う。評価は、ビデオコンテンツを作成した外部者と複数の評価者で最初に点検・評価し、その結果を踏まえて授業担当教員が総合判断する2段階で行うことを確認した。
- ⑥ 外部点検・評価・助言組織の構築と役割・機能は、「分野別」「分野横断」の外部点検・評価・助言コンソーシアムを拠点大学又は関係団体等でクラウド上にプラットフォームを構築し、それぞれ「外部点検・評価・助言検討会議(仮称)」を設置して、学修の到達目標、到達度の内容と測定方法、点検・評価コンテンツの公募（点検・評価者の適格性基準、点検・評価コンテンツの募集要領）、点検・評価コンテンツの厳選方法、学生に点検・評価結果をフィードバックする仕組み、点検・評価クラウドの構築及び運営など基本的な方針策定の必要性を確認したが、基本方針の策定は具体的かつ詳細な検討が必要とされることから、対話集会での反応を見ながら来年度の課題とした。

⑦ 点検・評価・助言モデル活用の適用範囲

本モデルは、思考力、判断力、創造力、表現力などの訓練に活用することを第一義としているが、学年進行で外部者による点検・評価・助言の継続性が見通せる段階になれば、卒業年時における学修成果の質保証にエビデンスとして活用することが可能であることを確認した。なお、美術・デザイン系分野における作品自体の独創性・芸術性・社会貢献価値や製作技術などの点検・評価には適さない。また、知識・技能の量及び正確性を中心とする実技・実演・実習、資格取得を目的とした分野には、学内又は学外機関による試験などによる点検・評価が適当であることから、本モデルの適用可能性について改めて各分野で検討する必要性を確認した。

⑧ 外部点検・評価・助言モデルのコンソーシアム構築について、持続可能なコンソーシアムの拠点をどのように設けるのか、有志大学間で持ち回りとする方法や本協会をはじめとする民間の教育関係団体などとする方法があるが、人的組織の整備、本モデルの意義について本協会でのパイロット的に実験を行い、検証の必要性を確認した。

⑨ 学修到達度の点検・評価基準の申し合わせ策定は、本協会が平成24年度にとりまとめ公表した「分野別」の学修到達目標を見直し、その上で点検・評価・助言の内容・水準をループリッック化して判断基準の統一を図ることを確認した。なお、「分野横断」の基準策定は、改めてコンソーシアムの検討会議で策定する必要があることと、能力要素を比較できるよう点検・評価項目に重み付けを行い点数で表示する他、担当教員から学生一人ひとりに助言情報をコメントする仕組みを検討すること課題とした。

⑩ 外部点検・評価・助言クラウドのプラットフォーム構築は、クラウド上にビデオ試問を集積し、大学教室の端末からアクセスして回答をクラウドに返信する機能、外部者による結果を点検・評価ループリッックに表示し、それを踏まえて授業担当者が最終的に結果を決定する機能、助言を学生にフィードバックする機能などが必要であり、サイバー攻撃に対する防御体制が整備されている民間クラウドが課題となる。なお、分野横断の場合には、上記に加えてクラウド上で自己学修とチーム学修が可能な機能、コーディネートによるファシリテート機能、チーム成果物の点検・評価を行う機能などの整備が課題となる。

⑪ 学生に点検・評価・助言結果をフィードバックする方法としては、卒業までに論理の展開力、知識・情報を関連付け多面的・多角的に考察する思考力、最適解を見出す合理的判断力、科学的考察力（観察、規則性を見出し、データ分析、類推・因果・帰属推論など）の観点から、到達度をレーダチャート化し、可視化する仕組みが課題となる。

⑫ 学修成果の質保証システムとしての有効性を検証するため、課題としてパイロット的な試行プログラムを策定し、実現可能性の観点から課題を整理し、効果的なモデルの詳細設計をとりまとめ、理解の普及促進を働きかけていくことを確認した。その際、試行プログラムで扱う対象は、到達目標の再確認など比較的取り組みやすい文系、理系の「分野別」のモデルからはじめることが確認された。「分野横断」のモデルは、到達目標の設定、IoT空間での学修支援体制、知財検証システムの整備など課題が山積していることから、まずは「分野別」での試行から取り組むことにした。

2. 課題解決に向けた検討内容の整理について

確認及び課題の洗い出しを踏まえて、再度、資料③の「思考力等の外部点検・評価・助言モデル構想の提案」、資料②の「外部点検・評価・助言モデルの概念図」について検討内容の整理を行った結果、以下の点について意見交換を行い、次回に改めて見直すことにした。

① 分野横断の授業であれば1大学だけでは対応できないので外部者による点検・評価の必要性は分かるが、分野別の授業にどうして外部評価が必要なのか分からない。また、分野別授業で不足している能力を補足する時に授業が終了している場合はどうするのか。

② 分野別授業の点検・評価は学内でもできるが、教育の質保証を高めるために複数の大学や社会が期待する観点から到達度の点検を行うことで客観性のあるオープンな点検が可能となる。教員にとっては外部者による点検・評価の結果を踏まえて、授業内容・方法の改善研究を深化し、FDの質を高めることが期待できる。但し、資格試験を目指す分野はこのモデルは適さないとしている。

③ まだ具体的なモデルのイメージがつかめない。分野別で外部者が点検・評価する学生の規模がどの程度であり、評価者が評価する学生の規模がイメージできないので、評価者の確保

ができるのか、規模の絞込みを検討する必要がある。希望する学生を対象とする、学部・学科の学生全員、ゼミなどの選択肢を用意しておく必要がある。また、点検・評価の負担感を軽減するための仕組みの検討も必要となる。

- ④ 負担感を軽減する方法として、クラウド上に点検・評価基準のルーブリックを掲載しておき、外部評価者がマーキングすることで点数表示できるようにしておく。そのために、点検・評価基準を能力要素別に大項目、中項目、小項目として表示し、更に到達度の水準を3から4設ける。また、担当教員は外部者の集計結果を見た上で評価するとともに、助言のコメントをテンプレート化しておき、学生一人ひとりに学びの振り返りを働きかける仕組みを設けておく。
- ④ 不足する能力を補足する方法としては、学年進行の中で対応できるようにeラーニングなどのセーフティーネットを検討する。
- ⑤ 「高速・大容量化」、「低遅延」、「同時多接続」という特徴を持つ第5世代通信規格が到来する将来は画像による回答が可能になるので、AIで助言ができるようになる可能性はあるが、一定の枠の中でしか評価できないという問題がある。それには枠外の多様な回答データをクレンジングするという膨大な作業が必要で長期的な研究が必要となる。
- ⑥ 点検・評価・助言モデルを12月の対話集会で説明するときに、今の提案は理想であってどこまでできるのか、何がコアなのか、分からない。実際にビデオ試問例を見せて、どのように記述式の回答が行われ、それに対して点検・評価・助言をどのように行うのか、イメージを共有できるようにする必要がある。
- ⑧ 次の委員会までに、機械工学分野でビデオ試問の見本を作成し、点検・評価・助言モデルの能力要素のルーブリック例、助言のコメント例を検討する。
- ⑨ パイロット的に試行するには、プラットフォームの構築などに人物、資金が必要なことから、当面は文系と理系の分野でそれぞれ一つずつとし、分野横断のモデルは当面プログラム試行を後に回す。

3. 検討内容に対する各委員の意見提出方法について

資料③の「思考力等の外部点検・評価・助言モデル構想の提案」を中心に、検討すべき項目及び内容について見直すため、第2回における委員会での検討を踏まえて資料④の「検討内容に対する意見提出方法(メモ)」に沿って、9月中旬までに各委員から提出することにした。

4. その他(次回開催日の決定)

次回は、10月9日(水)午前10時に開催することを決定した。